

【研究ノート】

喪失と再生の過程を歩く
—映画『すずめの戸締まり』における足元の描写—

伊藤弘了
(熊本大学 准教授)

およそあらゆる物語は『人が歩いてきて穴に落ちる。落ちて死ぬ』か『穴から這い上がる』か、どちらかの話である、という説¹があるという。この説に照らせば、『すずめの戸締まり』（新海誠監督、2022年）は後者、すなわち「穴から這い上がる」方の物語構造を採用していることになる。

もう少し映画に即した言い方をすれば、『すずめの戸締まり』は「深い喪失感を抱えた主人公の鈴芽が、自分の足で立ち上がり、歩けるようになるまでの物語」と要約することができるだろう。比喩的な言い方をしたが「自分の足で立つ」というのは、文字通りの意味でもある。『すずめの戸締まり』は、主人公が喪失から再生へと向かう過程を足元の描写によって表現しているからである。

映画は、少女がぬかるんだ草原を彷徨っているシーンから始まる。直後のシーンで、これが主人公・鈴芽（CV：原菜乃華）のしている夢であり、少女の正体が幼少期の鈴芽自身であることがわかる。幼い頃、鈴芽は岩手県に住んでおり、そこで東日本大震災に見舞われ、母親を津波で亡くしている。夢の内容は、鈴芽が実際に経験したことに基づいている。彼女は津波にさらわれて自分の前から突然いなくなってしまった母親を探していたのである。孤児となった鈴芽は、このトラウマ的経験による喪失感を抱えながら生きていくことになる。その後、鈴芽は叔母の環（CV：深津絵里）に引き取られて宮崎県に移住し、現在は17歳の女子高生になっている。

冒頭のシーンで注目すべきは、息を切らせて進む少女時代の鈴芽の覚束ない足元を、クローズアップで捉えたショットである [図1]。泥に塗れたスニーカーは、同時に鈴芽の心象を反映する小道具として機能している。やがて小高い丘の上に達した鈴芽は、歩を止めてその場にうずくまってしまふ。地震とは動かないはずの大地を揺るがす災害である。大地は動かないからこそ、人が拠って立つことのできる足場となる。地震は人々からその足場を奪うのである。

うずくまる鈴芽の耳に、誰かの足音が聞こえてくる。カメラはまず、彼女に近づいてくる人物の足元を捉え [図2]、その後、正面に回ってそのシルエットを写す。ゆったりとした服や風になびく長い髪の描写から、どうやら女性らしいことがうかがえる。だが、顔はよく見えないままである。

このように、映画は冒頭に謎を提示する。少女に近づくこの女性は誰なのか？ より正確に言い直せば、地面を力強く踏みしめるようにして歩きながら少女に近づくこの脚の持ち主は誰なのか？ 「深い喪失感を抱えた主人公の鈴芽が、自分の足で立ち上がり、歩けるようになるまでの物語」という先ほどの要約は、実はこの問いの答えを探し出す過程とぴったり重なるのである。

¹ 内田樹『映画の構造分析 ハリウッド映画で学べる現代思想』文春文庫、17頁、2011年。



[図 1]



[図 2]

鈴芽の足元は劇中で繰り返し強調される。たとえば、廃墟に出現した「後ろ戸」と呼ばれる扉をくぐる際にも足元のクローズアップが用いられている [図 3]。扉は「常世」と呼ばれる異空間の出入り口になっており、恐る恐る踏み出した鈴芽の靴先がその境界面に触れると、色合いを変えて元の景色に戻ってしまう。この描写から、通常の方法では境界線を跨ぎ越えることはできないらしいことがわかる。「序盤にできなかったことが、終盤にできるようになる」のは物語の定石である。「扉をくぐって常世に赴く」というのは、したがって「穴から這いあがる」のヴァリエーションである。映画はこのように、序盤から謎や伏線を散りばめ、さまざまな細部を緊密に連携させることで、ひとつの大きな物語を織りなしていく。



[図 3]

鈴芽の覚束ない足取りと呼応するのが、母親の形見である脚を一本欠いた三本脚の椅子であり [図 4]、好対照をなすのが最初の後ろ戸のかたわらに鎮座している要石である。鈴芽が抱える欠損（喪失）を視覚的に表現したアイテムに、旅のパートナーとなる「閉じ師」の宗像草太（CV：松村北斗）が姿を変えられてしまうのは物語展開上きわめて経済的である。また、地面に打ち込まれている要石は、その場に根を張っているのも同然で、自由に動くことはできない。鈴芽が引き抜いた要石が猫の姿をとるのは、それが自由を体現する動物だからだろう。やがてダイジン（CV：山根あん）と呼ばれることになる猫の姿をした要石は、足取りも軽やかに日本列島を縦断していく。あたかも、鈴芽にその後を追わせ、彼女に歩き方を教えているかのようである。



[図 4]

じっさい、鈴芽は次々に足を変えながらダイジンの後を追うことになる。この場合の「足」は移動手段の比喻である。まずは、フェリーに乗って宮崎から四国（愛媛）へと渡り、当地で出会った海部千果（CV：花瀬琴音）のバイクに乗せてもらう。その後、ヒッチハイクで二ノ宮ルリ（CV：伊藤沙莉）の運転する車を捕まえて、本州（神戸）に移動している。そこから新幹線を使って東京

に向かい、芹沢朋也 (CV: 神木隆之介) のオープンカーで故郷の岩手県を目指すのである。

孤児の主人公が、旅先で仲間を得て協力を仰ぐのは英雄譚 (ヒーローズ・ジャーニー) の典型的な構図である。千果やルリは「足」にくわえて、食事や宿も提供してくれる。さらには「身につけるもの」まで授けてくれる (千果は服と鞆を、ルリは帽子を譲ってくれる)。このモチーフも古今東西のさまざまな物語に見出すことができる。「身につけるもの」のモチーフを仕上げる最後のピースは、もちろん、足に対応する靴でなければならない。

東京で巨大な「ミミズ」(災厄の化身) と対峙した鈴芽は、街を守るために草太を失うことになる。同時に、それまで自分が履いていた靴 (ローファー) をも失う [図 5]。靴下のまま街中を移動したために鈴芽の足は傷つき、草太のアパートに戻ってきたときには血に塗れている。その血を洗い流して自分の制服に着替えた鈴芽は、草太の頑丈な靴 (ブーツ) を借り受け、草太を取り戻すための最後の旅に赴くのである [図 6、7]。



[図 5]



[図 6]



[図 7]

故郷の岩手にたどり着いた鈴芽は、幼少期にくぐったことのある後ろ戸を探し出し、そこを通過して常世へと至る。要石たち（ダイジン、サダイジン）の力を借りてミミズとの最終決戦を制した鈴芽は、無事に草太を取り戻すことに成功する。そして、三本脚の椅子が落ちているのを見つけ、直後に常世を彷徨っている幼少期の自分の姿を見とめる。かくして映画冒頭で提示された謎に答えが与えられる。あの足の持ち主であり、あのとき幼い鈴芽に語りかけたのは、鈴芽自身にほかならなかったわけだ。少女から「お姉ちゃん、誰？」と訊ねられた鈴芽は「私は、すずめの、明日」と答える。冒険を終えた未来の鈴芽は、しかるべき足取りを取り戻すことができたのである。

人間の姿に戻った草太と鈴芽は駅のホームに並び立つ [図 8]。各地の後ろ戸を戸締まりしながら東京に戻ると言う草太との再会を約し、二人は別れる。鈴芽は自分を追いかけてきた叔母の環とともに、道中でお世話になった人々へのお礼めぐりをしながら宮崎へと帰る。旅を終えた英雄は日常へと帰っていくものである。季節が夏から冬へと変わったある日、自転車で学校に向かう鈴芽は前方から歩いてくる草太の姿を視界に捉える。彼女はしっかりと地につけて自転車を止め、「おかえり」と言って草太を迎える。

通学途中の鈴芽が草太と出くわすシーンは、序盤の反復である。序盤のシーンでは、初めて会った（実は幼少期に常世で見かけているので初めてではないのだが）草太の美しさに目を奪われつつ、片足で二度、軽く地面を蹴って減速しながらすれ違う様子が描かれている。そのときには、すれ違いざまに草太から声をかけられ、慌てて自転車を止めている。足元の様子は映されず、上体を傾ける動きによって、唐突さとともに鈴芽の重心の不安定さが表現されている [図 9]。新海誠一流のコケティッシュな女性キャラクター描写だが、彼女はこれからこのあどけなさを手放すための旅に出るのである。

【図版クレジット】

[図 1～10] 『すずめの戸締まり』 新海誠監督、2022年（DVD、東宝、2023年）。



[図 8]



[図 9]



[図 10]